

# 殘花聚園 (七)

(日本幼兒教育史資料)

東京女子高等師範學校教授

石川謙

## 一 五、教子報(二)

前に掲げた『鑑草』の原文に基づいて、藤樹の幼兒教育に就いての説を一應考へて見よう。藤樹の説いた所から見るに、教育は「子に道ををしへて、その明德佛性を明らかにさせる事なり。」といふ事になる。つまり人間には、人間の本質も見るべき人間性が備はつてゐる。これが藤樹の所謂明德佛性である。かゝる人間性こそは、萬人に共通してゐるものであつて、人々個々がそれ自らの生活を、正しくするものであり深くするものであると共に、人が更に、他の人々を理解し、他の人々と協力して、一聯連帯の「全體」を形成し、「全體」としての人間の使命を幸福を全うさせる根本の性質である。教育はさうした意味での人間性を、明かに自覺させ宣揚させる世にも尊い仕事である。随つて、教育を盛んにする事によつて、人類全體が明かにな

り、幸福になり、向上する事が出来るのである。

藤樹の説くところによるに、世の中に於いて寶と呼ばれるものに、二つの種類がある。例へば金銀・玉といはれるやうな物や、名譽・位といった様なものが、其の一つの種類であり、人間に備はつてゐる人間性(所謂明德佛性)そのものが、其の第二の種類に屬する。然し金銀も名譽も位も「人」に附くものであるから、人間性こそが、何ものにも替へ難き第一の寶である。これを自覺させ宣揚させるものが教育であつて見れば、教育は凡ての人に共通に必要な人間第一の仕事である。

## 二

教育を施し始める時期は、藤樹に依れば、子供が既に胎内に宿つて、未だ生れない時から始めらるべきである。即ち況ゆる胎教が之に當る。

胎教は胎内に有うちのをしへなり。この時のおしへは

母の心もちに身の行ひにあり。いかんになれば、氣あつまり形かたまる始めなる故に、物にあやかりやすきゆゑなり。胎教の心もちに慈悲正直を本とし、かりそめにも邪なる念を發すべからず、食物をもよくつゝしみ、居ずまる身のはたらきをも正しくつゝしみ、目にむざむざしたる色を見ず、耳に邪なる聲をきかず、古への賢人君子の行迹、孝悌忠信の故事を記せる草子をよくみ、或は物語をきくべし。これ胎教の大槩なり。生る子のすがた形もよく智慧徳藝もすぐれなん事をねがふは、母ごこの心なれども、胎教によつて、子の容儀もよく智慧もすぐるゝ理りをわかまへざるゆゑに、胎教にちからをもちるす。されば胎教は子にをしゆる根本なれば、よく戒めはげますべきごごにこそ。

胎教に就いては此處に深く追及する必要がない。既に生れた後に於いての教育に關して、藤樹は、子供の教育に大人の教育ををはつきり、區別してゐる。大人の世界に子供の世界、大人の心の働き方に子供の心の働き方、を、はつきり、區別して、子供には子供らしい生活を營ませなければならぬと考へた所に、藤樹の教育の最も注意すべき點がある。

## 三

藤樹は「子にをしゆるに、幼少と成人との差別あり。」と

いつてゐる。教育法の區別を幼少と成人との間に置いて、はつきり、きつねばならぬといふ主張である。幼少の時の教育に於いて注意すべき唯一つの大切な事は、惡に慣れしめない善に附かせるといふ事である。然し惡を去り善に附くさいつても、それは、言葉の上や理窟の上なきで「説いてきかせる」事では出来る仕事でない。子供には眞似る力が非常に強い。眞似るといふ事は、行つて得る、といふ事である。活動性を生命としてゐる子供に於いては、行ふ事、働く事、動く事が學ぶ事である。眞似るといふ事も、實は目に見、耳に聞いた大人の働きを、子供の心と身體の上にて、再び現すといふ事である。それ故に「幼少の時には、父母、めのこなきの心行を教の根本とす」るのである。子供を玩具の如く考へて、心にもない詐をいつたり、からかつたりする事は禁物である。子供らしいものゝ言ひまはしや行なをを戯れにして見せて樂しむ事は、百害あつて一利なしと言はなければならぬ。大人の眞面目な眞剣な信念の上に和やかな行ひが行はれる事で、子供の教育が行はれてゆくのである。

子供には子供の生活がある。「重部わざ、たはぶれごなきをば、その子の心にまかせてあながちにいましめ制すべからず。」子供は子供らしい心の働きと身體の働きによつて、絶へず自らを生長させてゐるのである。此の事實を見

遁して「幼少せうの時より成人のものゝふるまひをさせん」せつからに急ぎ立てる事は、罪惡である。子供らしききり持つてゐない子供に、大人らしさを強ひる事は、「心すくみ氣屈きくつしていなもの」に叩き込んでしまふ道である。天真爛漫な子供らしい生活を、子供の時期に於いては充分に味はせなければならぬ。

こはいふものゝ、子供を放任して顧みないのが良いといふのではない。「幼少の時には教へ戒むる事惡しき心得こころえ、寵愛におぼれ、何事もその子の氣隨きずいにまかせて供樂きょうらくにふけるやうに墮落だらくさせてしまふ事は、之また非常な誤りである。「童わらわわざ、たはぶれなきをばその子のわざにまかせ」ながらも、「心の惡あくに習なまをば能教あたへ」戒めなければならぬ。

こいふのが藤樹の子供教育の原理である。子供には子供らしい生活を生活させながら、社會生活の原理に關しては、斷乎たんととして子供に依らしめる所の態度がなければならぬ。子供はいつまでも子供ではゐない。總て大人に變らなければならぬ約束の上に立つ子供である。子供らしさを尊重しながらも、此の約束を忘れてはならぬこいふのが、藤樹の教育觀の根本である。

#### 四

随つて、人の子の母たる者は、常に自ら自分を吟味し自分を批判して子供を育てる道に於いて誤らない様にしなけ

ればならぬ。孟子がまだ幼ない時の事であつた。外から歸つてきて「お隣で今豚を殺してゐたが、何にするのであらう」と聞いたのに答へて母は戯れに、「それはお前に喰べさせる爲だよ」といつてしまつた。いつた後から母親は、此の冗談が單なる冗談では濟まぬ氣がついた。詐を子供の清い心に投げかける事が、どんなに悪い影響を與へる事をひきく懼れ、其處で早速豚の肉を買つて來て子供に喰べさせた。此の昔話を引いて、藤樹は、

孟母のいのこをかひ給へる心、誠まことに有がたく、たへなる教をしへなり。子をそだつる人たれもこの心を師しとして、其子の我滿がまんの根ね、あらそひそねむ根、貪欲そんよくの根、狼戾ごんれいの根、人をあなざりかろしむる根なきを、引うごかし、ならはざるやうに用心ようじん第一だいいちなり。……これをかゞみて、その子にをしへいまして、ねがひもこむるところをしるべし。此の眞面目さが心の奥深くにあつて、然ももの柔かに無邪氣に子供に接して子供らしさを充分に發揮させなければならぬこいふのが、藤樹の願ひであつた。

(昭和十四年六月十三日)